

プロレタリア文学のサークル活動の研究

(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 : D155367

氏名 : 萬田 慶太

本研究は、一九三〇年代に提唱されたプロレタリア文学のサークル活動に注目し、その活動の様相と東京のプロレタリア作家の作品に現れた、プロレタリア文学理論に対する「受容と反発」について分析したものである。

サークル活動によって産み出された文学作品は、これまで一九五〇年代が主に研究の対象とされ、その「反発」としての自由な地方大衆の創作の側面を研究されてきた。しかし、そのサークル活動の提唱期は戦前のプロレタリア文学の活動によっており、その詳細は一般には明らかではなかった。地方の歴史研究や社会運動史研究が顕彰を行ってきたが、一九五〇年代に比して過激な反戦運動であったと評価されてきた感がある。また、その資料も弾圧によりほとんど存在していないと近年までされてきた。

本研究は、一九三〇年代のサークル作品を実際に発掘し、党中央のプロレタリア理論に対し、地方や作家自身が「受容と反発」していった様相を文学研究の側面から検討したものである。対象となった土地も、岡山、高知、朝鮮、大阪、長野、東京など広範囲にわたる。分析の結果、一九三〇年代サークル活動は、各地方や植民地によって「受容」に差異があり、「反発」する要素も発見された。また、残存資料の発見により、サークル活動は一九三〇年代全体の長期にわたることも明らかになった。一九三〇年代サークル活動は戦前期の地方大衆の自己表現を追求した評価されるべき文学運動だったのである。

第一部「サークル作品の検討」では、実際に地方や植民地のサークル活動を扱い、その表象を分析した。

第一章「作家同盟の講演旅行」では、プロレタリア作家貴司山治が撮影した、岡山と高知の講演の記録映像を複数の資料から特定、分析した。特に高知支部の顕彰的研究と往還を取り、高知支部の詳しい様相を論じた。結論として、高知側にとっては作家登用や活動拡大の機会であり、講演したプロレタリア作家にとっても変容の機会である講演における思惑の交錯を検討した。映像の高知城に向かって歩いていく高知支部員と講演したプロレタリア作家たちの姿に、その一時的な結託を見出した。

第二章「岡山支部とその活動」では、岡山支部の活動史をまとめると共に、サークル誌を対象に論じた。すでに東京のプロレタリア作家陣営は転向していた。党中央からの指示を無くしても岡山はその事態を「受容」し、サークル活動を継続したのである。ここでは新聞紙上や雑誌上に現れた、さまざまなプロレタリア文学にまつわる情報が、岡山のサークル活動を動かしていた。また、岡山は台湾、九州、愛知、東北など残存した出版ネットワークと交流を持っていた。岡山ではプロレタリア文学をアマチュア文学として継続する素地があったことを証明した。なかでも榎南謙一というサークル詩人を扱い、プロレタリア文学理論に囚われない自由な詩作を論じた。

第三章「中野重治「雨の降る品川駅」と朝鮮プロレタリア芸術家同盟の後期詩」では、中野重治「雨の降る品川駅」の国境線の凍る河の注釈と朝鮮プロレタリア芸術家同盟の金龍済の詩作「鮮血の思出」を論じ、中野詩からの「受容と反発」を分析した。「鮮血

の思出」は関東大震災を舞台とした詩であり、日本人プロレタリア作家には表現できない恐怖と怒りが表現されていた。結論として、中野詩では国境線のイメージが表象されたが、「鮮血の思出」ではそれが関東大震災の悲劇の現場となった国内の川に置き換えられていることを論じた。

第四章「中野重治「雨の降る品川駅」と戦後サークル『ヂンダレ』」では、中野詩の一九五〇年代サークル『ヂンダレ』の「受容と反発」を論じた。結論として、中野詩は教条として存在し、そこから『ヂンダレ』独自の逸脱的な詩作が試みられていったことを分析した。金民植「大阪駅の別れ」では、北朝鮮から来た朝鮮戦争反戦運動の同志と東京へ行く新しいディアスポラのルートが示された。李静子「ひとやの友に」では、雨という天候の粒子が呼吸という行為を通じて政治的な表象にまで高められていることを論じた。金千里「降りづく雨に」では、和歌山水害という危機的な契機を参照し、中野詩の鴨緑江から和歌山の土木業へ植民地的風景の根拠地を発見していることを論じた。

第五章「日本共産党解党派の出版活動」では、プロレタリア文学運動に参加しつつも、後に完全に「反発」していった、転向出版結社を論じた。その出版活動は浄土真宗に影響されたものであり、家族表象が類出するものとして挙げられる。転向者は家族という最後の生産単位に戻されることが教誨を通じて決定されたのである。そして転向犠牲者としての家族表象を出版物は流布した。そこに現れた家族表象は複雑化しており、浄土真宗の他力の思想を通じて、自力の念仏だけでは「孝行」して転向することはできないという言説が構成されていた。これはほとんど転向文学に見られる親との対決という問題を解決してしまったものとして読める。だが、その家族表象は、妻の場合は、転向する夫を裏切って墮落していくものとして表象され、植民地転向者にとって親は植民地にいるので帰郷することはできず、ジェンダーと植民地空間では困難な事象で矛盾をきたしていたと論じた。

第二部「プロレタリア作家とサークル表象」では、徳永直と中野重治を取りあげ、その作品に現れた、サークルとの共同製作の可能性を論じた。

第六章「徳永直「文学サークル」論」では、徳永の小説「文学サークル」に取り上げられた長野支部下のサークルを論じた。長野県下の実際のモデルとなった組合を特定し、その周辺の農村運動の様相を確認した。モデルとなった組合は救農工事などを奪取しながら、社会的諸矛盾の異議申し立て運動を行っていた。徳永はこの直後、一旦サークルとの関わりを断ってしまう。徳永にとってサークルが政治主義のものと考えられたからである。小説の理想的なサークルの大団円は、作者の「断りがき」によって潰えてしまった。だが、それはぎりぎりの段階で、徳永の政治主張だけでなく、長野の運動に影響を受け、その様相を刻印したテキストになっていると結論づけた。

第七章「中野重治「空想家とシナリオ」における印刷会社サークルへの参加」では、中野の小説「空想家とシナリオ」に表象として現れたサークル取材の可能性を探った。

転向後の小説である「空想家とシナリオ」では、主人公は役所勤めを行い、副業で教育映画のシナリオを書こうとする。そこには教育映画化された本の生産の映画的イメージが映画という形にならないまま、小説に描きこまれていた。おりしも円本ブームが起きており、動的な機械生産のイメージはサークル運動体の比喩であったが、同時に資本主義側にも通じていたのである。また、宮本百合子「朝の風」との交流に着目し、一九三〇年代末期の都市空間の過密状態と空き地について論じた。百合子は手榴弾工場の爆発事故を目撃しており、東京都市空間は空襲以前に危険なものとなっていた。最終的にそのような機械生産の映画的欲望や都市空間の歩行、読書行為などはサークルから得た共同製作の可能性だったのではないかと論じた。

結論として、本研究は一九三〇年代のサークル活動はけして党中央が完全に牽引していたわけではなく、むしろこれまであった自発的なサークル活動を吸収しながらふくらみ、党中央崩壊後も活動を自発的に継続した、プロレタリア文学中央の理論を「受容と反発」したものであったと論じた。作家一人一人にとってもその小説内部にサークルの影響は長く残存したと言えよう。

したがって、プロレタリア文学という概念は、多くの無名の地方大衆や新人が参加したものとして、雑誌上の表象を重要視しながら再定義されなければならない。また、植民地も含むものとして、多言語的に再定義されなければならない。そこに現れた国民国家の問題や労働、ジェンダーの問題は、戦後文学とも表象上通底するものとして、再度考察されなければならないだろうと結論した。

本研究は、プロレタリア文学を一人の作家などに代表させて論じるのではなく、集団の文学システムを戦前に試みたものとして、再度定義し直そうとしている。メディアの変容と文学の価値変容が叫ばれる昨今、本研究は、文学がそもそも集団によって評価付けされることを鑑み、それを相対化し、新しい文学システムの定義を主張し、戦争によって中断されてしまった、一九三〇年代サークル活動というものを考察した。